

# 国語科

## 1. 「高3国語表現」の学習指導

### ——62年度の実践とその反省——

長谷川 弘

#### 1. まえがき

本校での高3時における国語表現の授業も4年目を終えた。といっても筆者にとっては国語表現の授業は今回が初めての経験(本校に赴任して2年目)であった。そのため授業をする前は少なからず緊張し、又、不安でもあった。が、それも杞憂に終わった。国語表現の授業が始まって3年、その間に年間計画・指導方法・評価の仕方などがほぼ確立され、それらにある程度則って授業を進めればよかったからである。そうはいってもやはり細い部分ではまだ検討の余地があり、そうした点を踏まえ、来年度へとつなげていきたい。

さて、62年度もこれまでと同様、高校3年の生徒全員を対象とし、週2時間の授業を行った。指導体制もまた今までと同様、3名の教師が、A・B・Cの3学級を1名1学級ずつ担当した。(A組=米山, B組=斉藤, C組=長谷川)。

#### 2. 62年度の指導方針

(1) できるだけ多くの良い文章を紹介する

59, 60年度の反省のもとに、61年度では教科書を角川書店のものから旺文社の「国語表現」にかえた。理由は角川書店の教科書は「現代文」と性質が似通っているため、「国語表現」としての特色を持った授業が出来にくいからである。それで旺文社の教科書に変えた訳だが、これは「書くための技術」に重点を置いている。俗にいう How to ものである。これを61年度1年間使ったのであるが、その反省として今度は逆に、この教科書には「生徒に書く際の参考になるような良い文章が少なすぎる。」ということになった。そこで今年度は引き続きこの教科書をやることとするが、それに並行して良い文章、生徒に興味を持たせる身近な文章をできるだけ生徒に紹介していこうということになったのである。

(2) 文章を書く時間を、授業の中で十分に保証する。

この方針は国語科の中では定着したといえよう。本来なら文章を書かせる回数が多い方がいいに決まっているが、生徒の文章を添削して指導していく教師側の

能力を考えるならば1学期間に2, 3回が限度である。そういうわけで文章を書かせる回数は例年通りにして質的な充実をめざした。つまり一つの文章を書き上げる際には、

(メモ書→) 下書き→推敲→清書

という手順を追って行った。そして例えば400字～600字ぐらいのものならば下書き、推敲、清書にそれぞれ1時間をあてることを基本とした。このやり方の良い点として、文章を書くのが苦手な生徒も下書きということで気楽に書き始められる。次の授業まで生徒同志で見せあったりして初歩的な誤字・脱字などは友人の指摘で訂正される、などである。

(3) スピーチ・手紙を中心教材にする

学期に1つ中心となる教材を決め、時間をかけて行おうということになり、今年は1学期にスピーチ、2学期に手紙を予定した。このスピーチに関しては毎年生徒の関心も高い。国語表現の授業の中では定着したと見てよいだろう。

#### 3. 62年度、年間指導の記録

(1) 1学期

- ① 「国語表現」の目的・意義を説明する。
- ② 日記を書く。題は「始業式の日」。並行して、大宅壮一「青春日記」、吉田精一「自分を書きとめておくこと」など日記に関係する文章をプリントにして紹介する。
- ③ 原稿用紙の使い方、文の基本的な書き方などを説明する。
- ④ 講演「憲法について」の話しの要約。並行して教科書「三、要約文を作る」「六、推敲」を読み、要約のまとめとする。
- ⑤ 中間テスト
- ⑥ 教科書「二、話すこと」を読み、スピーチについての説明をする。
- ⑦ 小論文作成。題はこちらが用意した15の中から選択させる。
- ⑧ スピーチ(中間テスト以後行う。評価は2学期に回した。)

- ⑨ 暑中見舞（葉書の書き方）の練習。
- (2) 2学期  
各クラス共通で行ったこととして、
- ① 教科書「七、手紙」を読む。その他にも手紙に関するプリントなどを配布し読む。
- ② 手紙の下書き（4～5時間）
- ③ 〃 清書
- ④ 「文化祭最終日」の日記
- ⑤ 有島武郎「小さき者へ」を読み、その感想文を書く。
- ⑥ 中間テスト
- ⑦ 講演「エリカ号世界一周」を聞き、その要約と感想文を書く。
- ⑧ 「私の長所と短所（私の性格）」を書く。
- ⑨ 教科書「六、推敲」を読み、小論文「煙草について」を書く。
- ⑩ 漢字・四字熟語の学習

その他各クラス独自に行ったこととして、

- ⑪ 投書の手紙への返事を書く。
- ⑫ 推敲の問題練習。
- ⑬ 夏目漱石「夢十夜」を読み、その感想と、最近見た夢を書く。
- ⑭ 「現代饒舌考」、三浦哲郎「花を見る」等を読む。

(3) 3学期

- ① 社説を読み、要約と感想文を書く。
- ② 期末テスト

以上、それぞれについて説明と反省を書いてみたい。

(1) 1学期

① 生徒にとって「国語表現」という教科自体、なじみがうすいため、例年最初の授業はこの教科の性質・意義から説明していく。

② 今年も日記を書くことから始めた。話題を自分の身近なものからとした方が書きやすいという理由からである。添削では原稿の基本的な使い方、文末の統一（～です。～だ。）誤字・脱字など、ごくごく初歩的なものにした。推敲させ、清書したものの中で良かった作品については、次の授業でプリントにして配布した。このことに関してはいやがる生徒もいた。確かに「日記」ということで、生徒に配布というのは今後に残る課題であろう。

③ 細かい注意としては、段落分けを考える。略字は減点にする、句読点をしっかりとつける、一文が長すぎる、など。あとは日記でなく「感想文」になっている、構成に変化を持たせる、書きだしをもっと工夫する、などの注意を与えた。

④ 憲法の講演をメモし、それをもとにその講演の要約をさせた。ただゴールデンウィークのため講演後の授業がつぶれてしまい、講演の内容を忘れてしまっ

ている生徒も数多くいた。今後の課題であろう。（講演内容を忘れた生徒には憲法に関する社説を読ませ、その要旨を書かせた。）

⑤ 新聞の社説を読み、要約100字と感想300字。評価は1～4の4段階で行った。特に字数不足に関しては1の評価をつけた。

⑥ スピーチをするための注意事項といっても、なかなか難しい。教科書に書かれている説明では面白くない。本校国語科独自の「スピーチのための指導」マニュアルを作る必要がある。

⑦ 教師が用意した題の中から、各自1つ選んで小論文を書く。生徒が選んだものは「いじめについて」「テレビの功罪」など自分たちの身近なテーマが多かった。手順としてまず次のような構成メモ用紙を渡し、1時間で構成を考えさせ、下書き、清書と進ませた。

各 段 落 の 要 点					要 旨	題 目
		三	二	一		

⑧ 別項

⑨ この目的としては2学期から始まる「手紙」の練習といってよい。「葉書の書き方」のプリントも配る。

(2) 2学期

2学期・3学期は行事等で各クラスの授業時間にどうしても違いがでてくる。だから各クラスで独自なことも行われた。まず3クラス共通で行われてものとして、

①～③ 別項

④ 今年は本校始まって以来の不祥事、火事の起こった文化祭最終日の日記を書かせた。生徒にとってある意味でこの火事は貴重な体験となっているはずで、全員かなり真剣に書いていた。

⑤ 「小さき者へ」は父から子供たちに送られた手紙であるという考えのもとで、「手紙」の学習のまとめとして生徒に読ませた。また高校生活最後の読書感想文という形で感想文を書かせた。

⑥ 三木卓「障害者を隔離するな」の要約200字と感想200字。

⑧ この時期ぐらいから大学の推薦入学が始まり、この関連からこの題名とした。他にも推薦入学に出そ

うな小論文を書かせてほしいという生徒からの声もあった。

⑩ 入試の時期も近づき、又、文章を書く上で一番の基本である漢字・語句の学習も定期的に行った。漢字・語句の学習に関しては生徒もその必要性を認めるのか、真剣に行っていた。

その他、各クラス独自で行ったものとして、

⑪ 三省堂の教科書の表現に関する問題を利用した。「きょうだいと比較され、しかられる私」と「進路を変えたい…」という悩みを訴えた投書に答え、助言するという形式である。

⑫ これもある参考書を使って利用した。⑧の「私の長所と短所」という作文を書く前に行った。「わたしの性格」という題でA・B2つの文章を検討し、何故、Bの文章が良いのか、どこが良いのかなど具体的に考えていった。悪い見本であるAの文章に関しては生徒各自に推敲させ、検討し、提出させた。

⑬ 今までのどちらかという「小論文」形式の作文から、「文学的文章」作成への橋渡しとして考えてこの授業を行ってみた。生徒が文章を書く際に最も悩むのが、題材がないという点であろう。その点眠っている間にみた「夢」を書くというのは題材に困らなく、生徒も面白がって書くのではないかと考えたのである。最初に夏目漱石の「夢十夜」を読ませ夢の不条理、その不条理な夢を文章にすることの楽しさを学習したのだが、この授業は失敗してしまった。つまり「全く夢なんてみたこともない」という生徒が数多くいたのである。本当か嘘かは分からないが、そう言われればどうしようもない。他には、授業中ではうまく書けないうえ、家に帰って書いてくる宿題という形になってしまい、提出しない生徒も何人か出てしまった。

### (3) 3学期

3学期はほとんど授業ができなかったといえる。(H3Cでは1時間しか授業ができなかった。)

② 期末テストは社説を読ませ、要約200字、感想100字を書かせた。

## 4. 生徒の作文例

### ① 「始業式の日」

今日は始業式だった。この日はきっと私にとって忘れられない日になるだろうと思う。なぜなら私は今日、ちょっとした冒険をしたのだから。

今日学校が終わってから、一人で進学したいと思っている専門学校に行った。どうして今日行ったかと言えば、そろそろ親に話す時期だから、最後の下調べでも言うような事のために行ったわけだ。専門学校に着くと、丁度進学の担当の先生が食事中で少し待った。二十分くらいして先生がみえた。私は緊張した。話が

始まった。その先生は私に、高校について少し質問をされた。その後段々と、その専門学校について詳しく話をして下さった。その話を聞いていて、私はますますここに来たくなった。一時間くらいしてからだろうか、先生が「時間があればスライドを見ていきませんか。」と言われた。私はもちろん見せてもらった。そして結局そこで一時間半くらいの時間を過ぎた。専門学校を出た私は、何としてでも親も説得して、来年ここに通いたいと思っていた。

家に帰ったけれど、父親は親戚の家に出かけていかなかった。私はずっと考えていた。何て説得しようか。反対されることはわかっている。

父親が帰ってきた。私はどきどきしていた。さあ話すぞ。さあ話すぞ。だけどやっぱり話せなかった。どうしよう。

父がいとこから手紙をあつらえてきてくれた。彼女も心配してくれるみたいだ。よし、明日こそは勇気を出して話してみよう。(T. H)

### ② 「小さき者へ」を読んで

この無邪気な小さき者は、母親がいないという不幸を除いて、とても幸せだったと思うし、とても真っすぐな人間に育ったと思います。これだけのことを考えることができる偉大な父親と、あのような寛大な心の持ち主である母親の間に生まれたのだから。もちろんこの子たちは真の意味で大人になるまで、自分の身の上の不幸を嘆いたでしょう。しかし、この手紙を読み終えた後に、私が感じたいいような幸福を彼らも感じたのではないのでしょうか。それと同時に、自分の両親を誇り高く思ったのではないのでしょうか。痛い程、両親の愛が胸に伝わってきたのではないのでしょうか。

この手紙を読み終えた時、たとえようのないものに包まれていました。感動と同時にこの父親への尊敬の思い、そして同情の思いが次々とこみ上げてきたのです。とてもこの子供たちがうらやましくてなりません。と同時に、子供たちにこれだけの幸福感が与えられるような母親になりたいと思ったのです。自分の子供に会いたい気持ちを完全におさえ、子供たちのことを考えて、自分のお葬式の時は楽しく過ごさせてやりたいという願い。母親というものは、子供のためにこれだけ強くなれるものなのではないのでしょうか。反対に、子供のためだからこそ、これだけ強い女性になれたのかもしれない。——多分「子供への愛」以外の何物でもないでしょう。

「愛」というものが、これほどまでに人間を強くすることができるということを、この手紙を読んで初めて気付いたような気がします。(A・S)

③投書「きょうだいと比較され、しかられる私」への

返事。

前略。T子さんと同じように、僕の妹も僕と比較されて毎日必ずと言ってよいほど小言を言われ、叱られています。

僕は運良くここの中学・高校に入学し、両親も僕も何の苦勞もせず、ここまで来ることができました。だから余計に妹への風当たりが強くなるようです。

妹も小学校の頃は全く勉強ができなかったというわけではないのに、今のようにひどい成績になってしまったのは、(僕の目から見ると)あまりにもうるさく説教をする父親のせいではないかと思えます。

T子さんもそうではないかと思えますが、子供というのは、「ああしろ。こうしろ。」と言われると、かえって意地でもやるか、という気になります。逆に、ちょっとでも良い事したら誉めてやる、そうすれば必ずもっと「がんばろう」と思うはずです。

僕の父も、T子さんの両親もそのところがわかっていないのだと思います。もちろん親は子供のためを思って説教をしているのですが、「勉強をきなさい。」などということは何百回も言うより、どうすれば勉強をうまく進めることができるかを一緒に考えるべきだと思います。

しかし子供の方も、「勉強がいやだ。」と言って親にただ反抗するだけでなく、「どうして嫌なのか。勉強をしないのなら、何を将来やっていくつもりなのか。」を一度真剣に考えるべきだと思います。拒否しているだけでは何も進歩がないと思います。(僕自身そうでしたから。)

学生のくせに大それたことを言ってしまったようですが、「兄弟なんて見返してやろう。」と思うか、兄弟に関係なくがんばるかして、一番自分らしくやっていってほしいと思います。(K・I)

#### ④「夢」

帰り道、何の帰り道かはよくわからないが、とにかく帰り道、夕焼け空が真っ赤で前方がよく見えず、ふらふらと歩いていた。「百円でも落ちてないかなあ。」と下を向いたところ、キラリと光る何か落ちていた。本当に百円が落ちていたのだ。公園の横の歩道で、溝の上にブロックが乗っていて、そこに落ちていたのだった。「百円くらいねこばばしちやお。」と思って拾い上げた。なぜか不思議な予感がして、ここをもっと掘ってみようということになり、ブロックをどけた。溝の中には土がいっぱいで、百円たちがたくさん顔を出していた。

「やったあ。みんなもらっちゃえ。」と一生懸命掘り始めると、母親がいつも持っているような、エンジ色のがま口が出てきた。拾い上げ、中を見ると、これまた百円がいっぱい入っていた。「警察に届け……る

のはいやだもんね。」すると、そのままの状態画面が静止した。

「なんだ、夢だったのか…あれが全部自分のお金だったらどんなに助かるだろう。」そうつぶやいて目が覚めた。すると、ドアをドンドンたたく音がして、ドアを開けると警察官が二人、怖い顔をして立っていた。

「窃盗容疑で逮捕する。」

「えっ！あれは夢じゃ…」すると、私のポケットからザックザックと百円玉が…。こうして私は警察署へぶち込まれてしまったのだった。

「出して！出してよ。もうしないから…」と泣いていると、今度こそ本当に目が覚めた。

「やっぱりお金は欲しいもんね。」(K・M)

#### ⑤「私の性格」

「あなたって、本当に明るいわねー。」と、最近よく言われます。実際、自分でも驚くほど、明るい時があります。友達、特に大勢の人と一緒にしゃべったり、遊んだりすることが大好きなのです。息が苦しくなるほど笑う時ぐらい、幸せだと感じる時はありません。学校でも、みんながかたまっただけに騒いでいるのを見ると、どうしてもその中に入りたくなくなります。そして、ちょっと強引にでも、入ってしまうのです。また、自分がしゃべる時でも、まわりにはいる人はみな、引き込みたくなくなります。そして引き込んでしまいます。とにかく、大勢の人と笑って騒いでいたいのです。こういう欲求が強いことと、地声が甲高いので声が響き、騒がしいことと、笑い上戸であること、これらが明るいと言われるゆえんだと思います。

しかし、調子にのりすぎるといふ欠点があります。何かおもしろいことがないかと、いつもさがしているせいか、落ちつきがありません。学校での一授業、五十分が私には長すぎて、最後まで静かに座っていることが、できません。すぐ、まわりの人にちょっかいを出したり、しゃべったりするので、先生によく注意されます。高三になってまで、落ちつきがないというのは、これから先ずっとこのままなのかしら、ととても不安です。このことと、もの忘れがひどく、ちょこちょこどじを踏んでばかりいることを、直していこうと思っています。

## 5. おわりに

全クラスアンケート調査で、次のような結果がでている。

◎今年行われた表現の授業ので、何が一番楽しかったか？

	日記	スピーチ	感想・要旨	手紙	その他
男	4	60	12	10	14
女	15	68	4	9	4
計	10	64	8	10	9

(数字は%)

やはり圧倒的にスピーチに対する生徒の興味・関心がうかがえる。これからもスピーチの授業を充実させたい。

あと、生徒の要望として、二学期の授業では小論文・漢字など入試に関係するものをもう少しやってほしいという声もあった。確かに二学期は一学期のスピーチの授業のように、「柱」となるものがなかなかなく、

どうしてもあれこれ多くのものに手を出している感が強い。二学期の授業をどうするかという三人の担当者の話し合いの中で、「聞き書き・インタビュー」とか「卒業論文」なども出たが、入試間近のこの時期、なかなかそうもいかないだろうということに落ちついてしまった。二学期後半、何を授業の柱にするかが今後の課題ではなかろうか。